

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「気づかない意味変化」の一例 “すでにして” について

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会 公開日: 2023-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000020

「気づかない意味変化」の一例 “すでにして” について

新野直哉

1 はじめに

筆者は、近現代日本語の言語変化を中心に研究してきた。その成果は新野(2011、2020)の2冊の著書にまとめているが、そこで扱ってきた事例は大きく二つに分かれる。

まず、カギカッコつきの「誤用」——すなわち、辞書や「日本語本」等で、「このような意味(用法・形式)で使うのは誤りである」とされているなどして、「誤りである」という意識が社会一般に相当程度定着しているような使い方(新野2020:2)——と呼ばれるような事例である。

この事例としては、新野(2011)には「“全然”+肯定」、「役不足」、「なにげに」、新野(2020)には「“全然”+肯定」に加え「“気がおけない”・“世間ずれ”・“名前負け”」についての考察を取めた。

それに加えて、「気づかない意味変化」の事例も扱ってきた。これは、「ある程度進行していながら、国語学研究者や、「ことばの乱れ」に関する著作を発表するような日本語に関心の深い人々でさえもほとんど気づいていない——仮に気づいていたとしても、少なくとも公に発表された著作の中では指摘していない——意味変化」(新野2000:1)のことである。つまり、「気づかない意味変化」の事例は「誤用」には該当しない、ということになる。

「気づかない意味変化」の事例の研究成果として、「いやがうえにも」、「返り討ち」、「ていたらく」、「万端」については新野(2011)に、「嗚咽」については新野(2020)に取めた。今回扱う“すでにして”は、それらに続く、「気づかない意味変化」の一例である。

本稿では、語は“すでにして”のように“”に入れ、意味は<すでに>のように<>に入れて示す。また、引用に際し、漢字の字体は現行のものに直し、ふり仮名は必要なもの以外省いた。傍点は形を含め原文のママである。{}内、下線は筆者による。

2 研究の契機

“すでにして”という語は、今日の雑誌『週刊エコノミスト』(毎日新聞社)には

次のような例がある（毎日新聞の記事データベース『毎索』による）。

[1] WTO加盟により中国の完成車の輸入数量制限は撤廃され、輸入関税率も間もなく引き下げられる。すでにして供給過剰の中国の自動車産業は、国際競争力をもたず、輸出に活路を開くことも難しい。（『書評』－他』2005.2.22号：54）

[2] バイオリニストの山根一仁は2010年、横浜市立豊田中3年のときに、最年少で日本音楽コンクール1位になり、大きな話題を呼んだ。その後、桐朋女子高等学校音楽科（男女共学）、桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコースを経て、現在ミュンヘンで研鑽を積んでいるが、その間、すでにして一流演奏家としての活躍ぶりを見せている。（梅津時比古『〔アートな時間〕クラシック 山田和樹指揮 パーミンガム市交響楽団 山根一仁（ヴァイオリン）』2016.7.5号：105）

この語の意味について研究の対象となるような問題がある、ということを筆者が知ったのは、古田島（2013b）をその掲載誌発行直後に読んだ時であった。

これは、のちに挙げる図書・古田島（2013a）を自ら紹介する文章である。漢文学研究者である古田島（1957～）は、戦後日本の漢文教育の衰退とその結果としての漢文訓読体に関する知識の低下を嘆いたのに続き、同書の執筆を思い立ったきっかけを語る。それは、「誰もが知る著名な近代史の専門家」から、以前古田島が「某シンポジウムで漢文訓読体に現れる「すでにして」という言い回しに注意を促し、「すでに」の強調表現ではなく、「まもなく、しばらくすると」の意に解するのが正しいと言った」のを聞いていたおかげで、「明治天皇に関する文献」にこの語が出てきた際「すんなり解釈できました」、と礼を言われた、という2003年の出来事であった。この時古田島は、「老大家が、漢文脈における「すでにして」の意味を知らなかった」ということに「大きな衝撃」を受けた、としている。

筆者も、この個所を読んで「大きな衝撃」を受けた。情けないことであるが、これを読むまで、前掲の [1]・[2] のような“すでにして”の用例に接した場合は単純に「すでに」の強調表現」と解釈し（後に見るようにそれ自体は誤ってはいないが）、本来漢文訓読由来の語でそのような意味ではなかった、などということは考えたこともなかったからである。それ以来、機会があればこの語について調べてみたいと思いつながら、今日に至った。本稿では、この語に関する先行文献、今日の新聞記事での使用実態の調査結果を報告し、いささかの考察を加える。

3 “すでにして”の本義と新義

まず、現行の国語辞書ではこの語の意味をどのように記述しているのかを見てみ

る。本稿執筆時点の2022年末から過去10年間（2012年以降）の間に刊行された国語辞書の最新版の“すでにして”の項がどのような記述になっているかを調べた。その結果は以下のとおりである。

- ・《接続》〔文〕 そうしているうちに。（『学研現代新国語辞典』改訂第5版・2012）
- ・〔接〕 そうこうしているうちに。かれこれする間に。やがて。「一三人は立ちあがりぬ」〈鷗外訳・即興詩人〉（『大辞泉』第2版・2012）
- ・〔副〕 やがて。そうこうしているうちに。「すでにして日は暮れる」（『現代国語例解辞典』第5版・2016）
- ・〔接続〕 そうこうしているうちに。さるほどに。（『広辞苑』第7版・2018）
- ・〔接続〕 そうしている間に。そのうちに。「一戦端は開かれた」（『大辞林』第4版・2019）
- ・〔接〕 そうしている間に。そのうち。（『新明解国語辞典』第8版・2020）
- ・〔接〕 そうこうしている間に。そのうちに。「一勝敗は決した」（『明鏡国語辞典』第3版・2021）
- ・□〔副〕「すでに②」{=}「変化が完了していることをあらわす。もう。すでにして」を強めた言い方。「才能は一めばえていた」□〔接〕そうしている間に。さて。「一二月となった」（『三省堂国語辞典』第8版・2022。第7版（2014）は「そうしている間に。そのうち」のみ）

『集英社国語辞典』第3版(2012)、『旺文社国語辞典』第11版(2013)、『岩波国語辞典』第8版(2019)、『三省堂現代新国語辞典』第6版(2019)は、親見出しにも、“すでにして”の項の子見出しにも掲げていない。

“すでにして”と同様に漢文訓読に由来する語では、“すべからく”をくすべて>の意で使うことが「日本語本」や新聞・雑誌記事で「誤用」の定番例としてしばしば取り上げられ、国語辞書でもこの用法に言及がある¹。文化庁国語課が毎年行っている「国語に関する世論調査」では平成22年度・令和2年度の調査項目になっており、令和2年度の結果では、<当然、是非とも>という「正用」の回答が54.8%、<すべて、皆>という「誤用」の回答が32.1%となっている。

一方、“すでにして”については、「日本語本」等で取り上げたものは確認できていない。「“すでにして” 意味」というキーで『Yahoo!JAPAN』でウェブ検索を行ってみても、上位100件まででこの語の意味について論じた記事は、のちに見る古田島（1999）、松本（2015）以外ヒットしない（本稿のもととなる研究発表（稿末の「付記」参照）の情報がウェブ上に流れる前の2022年11月1日時点）。「国語に関

する世論調査」でも取り上げられたことはない。そして、国語辞書での扱いは上述のとおりで、<すでに>という意味を挙げているのは、新語・新用法を積極的に掲載することで知られる『三省堂』のみである。その『三省堂』ですら、掲載したのは2022年刊の第8版が初めてであった。

以上のようなことから、この語の意味変化は「気づかない意味変化」に該当する、といえる。したがって、この語の意味変化について考えるにあたっては、「正用」「誤用」ではなく、「本義」「新義」という表現を用いる。

前節で見たとおり、古田島は、<まもなく、しばらくすると>の意味をこの語の「本義」としている。しかし、例えば「駅に着いてまもなく電車が来た」と「駅に着いてしばらくすると電車が来た」とでは、待ち時間の長さに明らかに差がある(具体的に何分くらいかは個人差があるにせよ)。一方、国語辞書では、このような経過時間の長短に関わる意味を挙げるものはなく、<そうこうしているうち(間)に、そのうちに、やがて>のように時間の経過を漠然と示す表現が挙げられている。こうなると、この語の本義をどう設定するかが問題になってくるが、本稿ではひとまず、古田島と国語辞書の両者を併せて、長短はともかく一定の時間の経過を表すのが「本義」と考えることとする。そして、「「すでに」の強調表現」として使われているものを「新義」の例とする。

4 先行文献

古田島は、前掲の古田島(2013b)以前に、筆者の確認できた限りで古田島(1994、1996、1999、2013a)と繰り返しこの語の新義を問題にしている。しかし、それ以前に、詩人・入沢康夫(1931~2018)による入沢(1993)がある。

4-1 入沢(1993)

入沢は、この文献(旧仮名・旧字体で書かれている)で、1967年に発表した自身の口語体の詩の中で“すでにして”を「既に」と区別のない意味」で使い、その時点ではこの語について「ただか「すでに」の延言だらう位の意識しかなかった」と回顧したのち、こう述べる。

[3]ところが、これを発表してから半年ほど経つて、なんとなく気になつたのか、辞書を引いてみてショックを受けた。「すでにして」には、「さうかうするうちに」「さうしてゐる間に」の意味はあつても、「もはや既に」の意味はないのだつた!

その翌年入沢はこの詩を自著に収めるが、その際には、「この「すでにして」に、なにかの手当てをするかどうかについて、かなり深刻に考へた」ものの、「この言葉に「さうしてゐる間に」の意味しかなく、ここでもその意味に取られるとしても、

それでも話の運びはさしてをかしくはならない、と判断したこと」、「気を付けて観察してみると、かなり多くの人達が、これを私同様に、「もはや既に」の意味で使っているのが、わかつた」こと等の理由で、「自分の《誤用》を、それと知りつつ押し通すほかなかつた」という²。

さらに、入沢（1993）執筆時点でのこの語に関する認識を次のように語る。

[4] だが、忸怩たる思ひを完全に拭ひ去り得たといふ訳でもない。その後も、ほかのだれかれが、「すでにして」をあたかも「既に」の強調のやうに使っているのには、何度となくお目にかかつた。そして、辞書にある意味での用例には、近時全くお目にかからない。だが、ごく最新の辞書でも、この語に対しては、「とかくの間に」「さうしてゐるうちに」の意味しか、相変らず、認めてゐないやうである。

古田島はこの文献にはふれていないが、現時点では、この入沢（1993）が、今日における“すでにして”の新義について論じた最も早い文献ということになる。

4-2 古田島（1994、1996、1999、2013a）

古田島が初めてこの語の意味を取り上げたのは、古田島（1994）である。冒頭で「以前から少し気になっている言葉遣い」としてこの語を挙げ、

[5] この語は「すでに」の硬い言い方として、あるいは雅びな——時には気取った——表現として、「すでに」と同義に使われることが多いように見受けられる。として、野坂昭如『姦の研究』（1988）の「ぼくは、すでにして、ほとんど性的不能者である。定命を過ぎること、七歳なのだから、「すでに」は余計とも思う」という例を挙げたのち、この語の漢文訓読に由来する本義（古田島自身が「本義」と呼んでいる）はく間もなく、しばらくして>という意味であることを述べる。そして、この問題について次のような言語規範意識を示す。

[6] ところが、先に述べたように、現在の日本語の文章では、「すでにして」が「すでに」と同義に使われていることが少なくない。これが気にかかるのである。

むろん、「すでにして」を「すでに」と同じ意味で使うのは誤用だと言ってしまえば話は早いかもしれない。あるいは、現今の「すでにして」の用いられ方を見れば、すでに誤用が慣用となり、すでにして正用になろうかという情勢なのかもしれない。それはそれで一つの言い分であり、また、一つの認識であるだろう。改めて小うるさく騒ぎ立てるつもりはない。

古田島（1996）は、古田島（1994）について「ある恩師と先達から些少のお言葉をいただいただけで、これといった反応は頂戴できなかった」としながらも、この

問題は「私にとって漢文訓読の伝統の衰退ひいては消滅を象徴する一つの事件なのである」とその重要性を強調する。そして、三好達治『詩を読みむ人のために』(1952)の「詩を読み詩を愛する者は既に彼が詩人だからであります」という一節が、それを収めた文庫本のカバーの「宣伝文句」では「詩を読み詩を愛する者はすでに詩人であります」となっているという例を挙げ、

〔7〕再び誤解なきようお断りしておくが、私はこれを「すでにして」の誤用だと声高に言い立てるつもりはない。ただ、「すでにして」を例として、我々の漢文訓読表現に対する感覚が衰えた事実を、あくまで一つの事実として指摘しておきたいのである。

と改めて自身のこの語に関する言語規範意識を述べている³。

古田島(1999)は、同年に行われたセミナーでの講演を書き起こしたものと思われる。「現在の日本の教育現場には、訓読をまともに教え授ける場所がどこにもなくなってしまった」結果、「漢文訓読の素養が乏しいために、訓読表現に対する語感が鈍化してしまった」例の一つとして、古田島(1994)に挙げたのと同じ野坂の例を挙げ、

〔8〕〈純然たる日本語として、「すでにして」は「すでに」の強調表現として成り立つはずだ〉との意見もあるでしょう。そのような主張を認めるのに吝かではありません。けれども、「すでにして」が、それこそすでに現代の我々の耳に訓読表現として響かなくなっている事実だけは、きちんと認識しておきたいと思います。(149-150)

とこれまでと同様の主張をする。

古田島(2013a)は大学等での近代史の授業で漢文訓読体の資料を読む際の注意点をまとめた書で、「すでにして」については、

〔9〕「すでにして」と聞けば、だれしも「すでに」の強調形と受け取るのではあるまいか。意味は「すでに」と同じで、「もはや、とっくに」くらいに解釈しておけばよからう、と。けれども、事実は違う。(116)

として、この語の本義を説明する。そして、『米欧回覧実記』(明治11年)の「已ニシテ汽車ハ〈メーセ〉河ヲ渡ル」等の例を挙げ、〈すでに〉の意味に解釈しても「特に前後の文脈と齟齬を来たさないの、なかなか始末が悪い。おそらく、「すでにして」は、最も誤解に気づきにくい訓読表現であろう」とする。

さらに「あとがき」(208)では、

〔10〕実際、通常の日本語の語感としては「すでにして」を「すでに」の強調形

として用いることも可能な以上、もし、「まもなく、しばらくして」の意に非ざる「すでにして」が現れたとすれば、それはそれとして受け容れるしかない。たぶん、そのような「すでにして」が漢文訓読体に姿を現す可能性はきわめて低いと思うけれども。

と述べる。

以上のように、古田島は一貫して、“すでにして”が新義で使われる・解釈されることを、自身にとり悲しむべき重大事である「漢文訓読の伝統の衰退ひいては消滅」の象徴的事例ととらえながらも、現代日本語において新義で使うことについては容認する姿勢で、これを「誤用」として排斥するような言語規範意識は示していない。

4-3 松本 (2015)

前節で見た古田島による文献は、著書である古田島 (2013a) 以外は学術誌の「研究ノート」的なコーナーにあるものや講演の文字化、自著の紹介文で、(狭義の)研究論文には該当しないものであった。研究論文の中でこの語を扱ったものとしては松本 (2015) がある。

この論文は、「助辞「ニシテ」の助動詞的用法について、いわゆる副詞語尾として用いられる「ニシテ」の現代語の中での用法とその広がり、書き言葉コーパスの用例から見ようとしたもの」(要旨より)で、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のデータから「文語体で書かれているものや、誤植その他明らかに間違いと思われるものを手作業で除き、考察の対象とした」(同)とある。「往々ニシテ」「ようやくニシテ」などととも“すでにして”が対象となっている (118-119)。

ここでは、“すでに”との違いについて、「「すでニ」に比べ、「すでニシテ」には多く「てくる」「ている」「である」などを伴い、「状態の継続」が感じられる用例が多い」として、

[11] 言い換えれば、「(すでに) 済んだ」こと、すなわち過去の時点において事態が成立したという事実あるいは時期に問題のみを表すのでなく、「その時点、その段階、その状態において (すでに) ある」こと、すなわちその時点における状態を表すものである。事態の成立の時期が今問題としている時点よりも(予想外に)早い時期である、というのが「すでニ」の表現する意味であるとすれば、「すでニシテ」は、その事態が早く成立し、その状態が今ここにある、と描写的に表現している、そのような点に「すでニ」との違いが読み取れるように思う。

と述べる。

ここでは、“すでにして”の本義についてはまったく言及がない。入沢や古田島の文献も取り上げられていない。

5 今日の新新聞記事での使用実態

筆者は、この語が今日どのように使われているのかを知るため、新聞記事における使用実態の調査を行った。「三大紙」と言われる『朝日新聞』・『毎日新聞』・『読売新聞』の記事を、各紙の記事データベース（『聞蔵Ⅱビジュアル』・『毎索』・『ヨミダス歴史館』）を用い、「すでにして」「既にして」「已にして」の3種類のキーで検索した。検索対象期間は、1992～2021年の30年間である。著作権等の関係ですべての記事が検索対象ではない。当然ながら、

[12] 秋田県は19日、高濃度の放射性セシウムが検出された稲わらを牛に与えていた農家に対し、牛の出荷自粛を要請した。群馬、静岡県両県も同様の要請をすでにしている。（「秋田県、牛出荷自粛要請」読売2011.7.21東京朝刊）
のような、“すでにして”という語の例でないものは除いている。

その結果が次ページの表である。1件の記事に複数の例がある、というケースはなく、記事の件数イコール例数、ということになる。全145例が得られた。

ここで、新義を二つに分けてみた。第2章に挙げた [1]・[2] を再度見てみると、[1] では、輸入関税率引き下げ前の今の段階ですでに供給過剰という状況になっている中国の自動車産業は……ということ述べている。一方 [2] は、山根がまだ二十歳そこそこ（当時）という若さで「研鑽を積んでいる」段階なのに、早くも「一演演奏家としての活躍ぶりを見せている」ことを評価している。

[1] のようなくある状況・事態が過去に成立して、今に至っている>という成立完了の表現に重点のある場合は新義1、[2] のようなくある状況・事態が、一般的な常識・社会通念から見て、意外なほど早い時点・段階で成立している>ことに対する驚きや称賛の念の表出に重点のある場合は新義2とした。判断に迷う例もあったが、どちらかに分類した。

さらに、本義か新義か、判断が難しい例もある。

[13] とにかく岸 {信介} は何でも早く無駄がない。少年時に維新の志士たちの魂を曾祖父信寛を通じて追体験し、山口中学時代に松陰の国家思想を刻み込んだ岸は、すでにして政治家への志望を固める。（御厨貴）（「岸信介」原彬久著権力者の複層的・多面的な生」読売1995.2.27東京朝刊）

この「すでにして」は、本義<間もなく>とも、新義2<もう、この（まだ中学生の）時点で、早くも>とも解釈できる。

表 新聞記事における“すでにして”の例

	朝日				毎日				読売			
	本義	新義1	新義2	?	本義	新義1	新義2	?	本義	新義1	新義2	?
1992						1	1			1	2	
1993												
1994			3			1						
1995						4	1					1
1996			3				1	1		1	1	
1997		1	1	2		1				1		
1998						1				2		
1999		3	1			2	1					
2000		1		1		2	1				2	
2001		2										
2002			2			2	3				1	1
2003		1	4									
2004			3	1			1	1				1
2005			1			1				1	2	
2006			2			1						
2007		2		1		1	1				1	1
2008		1	1	1		1	2				2	1
2009			2			1					1	
2010								2			1	
2011		1				1	1	1		1	1	
2012			1				4				1	
2013			2				1				3	
2014			1					1				
2015		1	1			2						
2016		1				1	1	1				
2017			1				1					
2018		1					1					
2019			1									
2020		1	3			1	2	1				
2021		1	2			2						
計	0	17	35	6	0	26	23	8	0	7	18	5

*2000年の毎日の新義1、2020・2021年の朝日の新義2に同じ記事2件

また、2004年に、山形県の神社で斎藤茂吉の短歌「すでにして蔵王の山の真白きを心だらひにふりさけむとす」を刻んだ歌碑が完成したことを報じる記事が、3紙すべてに掲載された。茂吉の歌であるから本義の例の可能性が高いと思えるが、虚心に歌だけを見れば、上の句は<早くも蔵王の山がもう雪で真っ白になったのを>と新義でも解釈できる。この例のように、詩歌、特に俳句や短歌は場面や文脈の情報量が少ないこともあり、どちらの意味か判断しにくいものが多い⁴。以下は、歳

月の流れによる状況・事態の変化を詠んだ読者の短歌作品である。

[14] 墓碑の背の戦歴数多すでにして苔むしてをり六十五周忌（「朝日歌壇」朝日2007.11.11朝刊）

[15] すでにして若手の敬語に囲まるる齢となれりOB会に（「毎日歌壇：篠弘・選」毎日2020.9.21東京朝刊）

[14] 「(長い年月が過ぎ) そうこうしているうちに／もうすでに苔むしている」、

[15] 「(長い年月が過ぎ) そうこうしているうちに／もうすでに若手の敬語に囲まれる歳になった」のいずれの解釈も可能である。このような例は「？」に分類した。

そして、本義としか解釈できないような例は、1例も見られない。

まず、新義1は3紙合計で50例である。

[16] ところが現在、歳出削減、「小さな政府」論がほうはいと拡がりつつある。

実際の政府支出はどうかといえば、国民所得に占める社会保障給付額で見て、日本は先進諸国の中で最低クラス、つまり、すでにして十分に「小さな政府」なのである。（「今週の本棚：中村達也・評『格差社会 何が…』／『階級社会 現代日本の…』」毎日2006.10.22東京朝刊）

日本は今後「小さな政府」を目指すべきとの論があるが、実際は今の時点でもう十分に「小さな政府」になってしまっている、と述べている。

[17] ◆民主党の当選議員308人のなかには新人が143人いる。その多くが小沢代表代行（選挙担当）の手で公認候補に選ばれ、資金と戦術を授けられた、いわば“小沢チルドレン”である◆すでにして党内最大勢力の小沢グループがさらに膨張するのは確かで、首相のいすに座る鳩山由紀夫代表も小沢氏の意に反する政権運営はむずかしからう（「[編集手帳]」読売2009.9.1東京朝刊）

民主党（当時）が大勝した2009年の総選挙後のコラムである。「小沢グループ」は選挙前の時点でもうすでに「党内最大勢力」の状態に至っていたのに、「小沢チルドレン」の加入でさらに膨張する、ということである。

[18] すでにしてパチンコ大国 その上にカジノを作る意図を解せず（「若越歌壇・俳壇／福井県」朝日2018.6.20朝刊）

日本はもう今の時点で、ギャンブルであるパチンコが広く普及した「パチンコ大国」になっているのに、さらにその上にカジノを……という疑問を詠んでいる。

[19] 私たちはしばしば、至上の理解者が既にして死者であることに絶望する。しかし「人生に生きる価値を見出している人に会うとびっくりしてしまう」と書く著者が、シオランと現代の日本でもがき続ける私たちを緩やかに結び付けてくれる。（金原ひとみ）（「(売れてる本)『生まれてきたことが苦しいあなたに 最強のベシミスト・シオランの思想』大谷崇〈著〉」朝日2020.3.21朝刊）

「至上の理解者」が今の時点ではもう死者になってしまっている、ということである。

新義2の例は3紙合計で76例である。

[20] 自民、民主両党の党首選びの季節だ（そう言えばそうだったか）。来年秋の米大統領選はすでにして過熱。制度の違いはあるが、それだけか。（「[[近事片々]]」毎日1999.8.25東京夕刊）

盛り上がりぬ日本の「党首選び」に対し、米大統領選は来年秋なのに前年8月の今の時点で早くも過熱している、という対比である。

[21] すでにして風格のあり牡丹の芽（「朝日俳壇」朝日2013.3.18朝刊）

牡丹の花に風格があるのは当然として、まだ芽の段階なのに早くも風格がある、という驚きを詠んだと解釈した。

[22] 「日露戦争後は」社会にゆとりが生じたわけだ。全国の中学校に野球部が設置されるのもこの時期からである。そこへ例の国有法で鉄道網が整備され、大阪の新聞社（東京ではない）が全国大会の開催を思いつき……第一回の大会では、すでにして観客席でカチワリが売られていたという。（「甲子園、国民をつなぐもの 全国高校野球選手権大会、6日開幕 作家・門井慶喜さん寄稿」朝日2019.8.4朝刊）

今日甲子園の名物とされる「カチワリ」が、早くも第一回の大会から売られていた、という意外な事実を指摘している。

以下は、冒頭に挙げた〔2〕と同様の、ある分野での「早熟の天才」への驚きが示された例である。

[23] 第1歌集『no news』（砂子屋書房）で、歌壇の登竜门的な賞である現代歌人協会賞を今年、受賞した。20代の青春期の歌が中心だが、すでにして高い完成度を見せる。（「島田幸典さん 「定型」大切に、端正な歌作る（ようこそ）」朝日2003.8.20夕刊）

[24] たとえば、「清新」という花言葉のあるバラでもあろうか。15歳の高校1年生、石川遼選手が最年少の記録づくめで男子プロゴルフツアーを制した◆一流プロ選手と競り合う重圧にも動じない攻め一徹のゴルフを見ていると、すでにして大輪であり、この先どこまで大きくなるのか見当がつかない。（「編集手帳」読売2007.5.22東京朝刊）

[25] この巻は中井の最初期作品群ということになるのだろうが、すでにして端尻すべからざる知性の片鱗が至るところに覗く。（「今週の本棚：斎藤環・評 『中井久夫集1 1964—1983 働く患者』 = 中井久夫・著」毎日2017.3.19東京朝刊）

[23] まだ20代の歌なのに、[24] まだ15歳の若さなのに、[25] まだ最初期の作

品群なのに、それぞれもうこの早い時点で、それに似合わぬ高いレベルに達している、という意外性を強調するのに使われている。

6 おわりに

前節で見たとおり、“すでにして”は今日の新聞記事において、本義か新義か判断できない例もあることを考慮しても、圧倒的に新義、つまり『三省堂』以外の国語辞書には出ていない意味で使うことが優勢である、と言ってよい状況である。国語辞書でも、小型辞書の場合は現代語中心であるから、漢文訓読表現としての意味ではなく現代語としての意味だけ載せればよい、という姿勢もあり得る。しかし、逆に漢文訓読表現としての意味しか載せず、今日の新聞記事で圧倒的に優勢な意味は載せていないのである。これが、新義がここ数年で顕著になったから、という理由ではないことは、表から明らかである。

小柳(2013)は、言語変化には以下の三段階がある、とした。

〔26〕案出：新しい言語表現の産出。ある個人がある時に1回行う。

試行：新しい言語表現の拡散。複数の人が散発的に行う。

採用：新しい言語表現の受容。ある集団内で人々が漸次的に行う。(16)

そして、「採用」の段階に至ってはじめて言語変化といえる、としたうえで「多くの用例数が確認できれば問題なく採用されたと判断できるが、明確な判断基準があるわけではない」(17)としている。“すでにして”の場合、今日の新聞記事での使用実態から、新義は明らかに「採用」と呼べる段階に達している、といえる。つまり、この基準に照らしても、“すでにして”を「気づかない意味変化」と呼ぶことに問題はないと考える。

今回は、今日の新聞記事という限られた資料での調査にとどまったが、これまで日本語研究者が目を向けてこなかった“すでにして”について、今後の議論の「たたき台」は提供できたのではないかと考えている。

最後に、“すでにして”にこのような意味変化が起きた理由について考えてみる。“すべからく”をくすべて>の意で使う「誤用」の拡大については、まず語形が似ている、そして“べし”や命令形と呼応するような「正用」の例をくすべて>の意だと思って読んでみても文意が通じるケースも多い、といった理由がしばしば挙げられる。“すでにして”についても、言うまでもなく“すでに”と語形は似ているし、本義・新義いずれにも解釈できるような例は明治期にも、今日にもある。

また、松本(2015)では、“すでにして”のほか、時間の経過を表す副詞に「にして」がついた“ようやくにして”や“たちまちにして”も扱っているが、これらは「に

して」がつく形とつかない形とで大きな意味の違いはない。そこからの類推、という要素も考えられる。

もちろん、古田島が再三再四指摘するような、漢文訓読に関する知識の貧弱化や感覚の鈍化、というのが大きな要因ではあろう。それに関連し、高校漢文での扱ひも指摘しておきたい。古田島は、今日“すべからく”を<すべて>の意で使う「誤用」についても、筆者の確認できた限りで1997～2002年に三たび「研究ノート」の文章を発表しているが、その最後のものである古田島（2002：175）では、“すでにして”と比較して次のように述べている。

[27]「すでにして」について誤解が生ずるのは致し方ないかもしれない。高校で習う漢文（現今、たいていの日本人にとって、これが漢文訓読を学ぶ最初で最後の機会だろう）に「既而」や「已而」が頻出するわけではないからだ。しかし「須」＝「すべからく～べし」は漢文訓読の花形とも称すべき再読文字の一である。その誤解に基づく訓読表現が大手を振ってまかりとおるとは！これぞ漢文訓読の伝統が潰えた証拠だと叫んでも過言ではあるまい。

試みに、筆者は現在書店で売られている高校生向け・大学受験用の漢文の参考書・問題集を10種類ほど調べてみたが、「重要語句」として“すでにして”を挙げているものはなかった。一方「すべからく……べし」はどの参考書・問題集にも出ており、必修の句法、という位置づけである。それにもかかわらず「誤用」が広がっているのであるから、まして“すでにして”の新義が定着するのは避けられない、ということになる。

今日の新聞記事以外での資料を用いた調査、意味変化の時期やその過程についての調査・考察等については、今後の課題とする。

注

- 1 呉（2010：8-13）は文化人や大学教師によるこの語の「誤用」例を列挙し、
[28] 中途半端な知識人、丸山真男なら「亜インテリ」と呼ぶような連中が、一般民衆を威嚇するために、自分でも意味を知らない言葉を得意気に誤用している。

などと辛辣に批判する。

また、連作4コマ漫画・峰なゆか『アラサーちゃん』（『週刊SPA!』2018.7.17・24号、扶桑社）中の一編「確信犯もよくね？」（84）では、巷間「誤用」と呼ばれる事例のうちで、人それぞれに、気にならないものどうしても許せないものがある、という言語規範意識の一面を描く中で、「すべからく」を「すべて」のかわりにいい言い方だと思ってるヤツ」を槍玉にあげている。一般向け週

刊誌に掲載された、言葉に特に関心のない層も読むこのような漫画作品で言語規範意識・「誤用」の問題が取り上げられたことは、そのような層への影響力という点で決して軽視できない。

2 この措置をとった理由について入沢は、

[29]「赤信号、みんなで渡れば……」ではないが、言葉の誤用も、その例が圧倒的多数になれば終には辞書にも採用されるといふのは、「洗滌——センデウ」の例にも見られる通りである。

という、「誤用」一般に対する自身の言語規範意識も述べている。

3 この三好達治の言葉については、次のような新聞記事がある。

[30] 最近、気づいたことがある。それは、句を詠むということは、詩人の端くれとなるということだ。商売柄、野次馬根性はあるのだがデリカシーに欠ける私が詩人？ 嗚呼、何とも恥ずかしい。でも、三好達治が50年以上も前に書いている。「詩を読み詩を愛する者はすでににして詩人」と。(「句会は楽し：70) 理解し合う、奥の深さ／愛媛県」朝日2008.11.9朝刊)

ここでも、やはり「すでにして詩人」の形で引用している。

4 茂吉の歌はもう一首、「すでにして日のかがやきに雪かづくとほの山山浮きいづるころ」がヒットする(「茂吉の世界、写真で描く ゆかりの最上川など46点展示 東京の小平さん／山形県」朝日2008.1.14朝刊)。この歌も、茂吉に関する文献で詠まれた背景等を調査すればどちらの意味の例か判断できるかもしれないが、この記事だけではそれはわからず、「？」の例ということになる。

参考文献

入沢康夫(1993)「詩にかかはるあれこれ15 思込み・思違ひ二題」『るしおる』

16：46-48. 書肆山田*入沢康夫(2002)『詩にかかわる』(思潮社)に収録

呉智英(2010)『言葉の煎じ薬』双葉社

古田島洋介(1994)「Le Rond-Point 「すでにして」考」『比較文学研究』65：185-186.恒文社

古田島洋介(1996)「Le Rond-Point 「すでにして」考(続)」『比較文学研究』68：131-134.恒文社

古田島洋介(1999)「明治初期の漢文訓読と『文明論之概略』」『近代日本研究』16：141-161.慶應義塾福澤研究センター

古田島洋介(2002)「Le Rond-Point 「すべからく」考(余話) —「一つ」は「独り」か?」『比較文学研究』79：174-177.恒文社

古田島洋介(2013a)『日本近代史を学ぶための文語文入門 漢文訓読体の地平』吉

川弘文館

古田島洋介（2013b）「口出し御免」『本郷』107：11-13.吉川弘文館

小柳智一（2013）「言語変化の段階と要因」『学芸国語国文学』45：14-25.東京学芸
大学国語国文学会＊小柳智一（2018）『文法変化の研究』（くろしお出版）に収録

新野直哉（2000）「《気づかない意味変化》の一例「いやがうえにも」について—「いやがうえにも盛り上がる」とは？」『国語学研究』39：1-11.「国語学研究」刊行
会＊新野直哉（2011）に収録

新野直哉（2011）『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない
変化」を中心に』ひつじ書房

新野直哉（2020）『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』ひつじ書房

松本秀輔（2015）「現代語における「ニシテ」の副詞語尾の用法をめぐって」『同志
社大学日本語・日本文化研究』13：115-131.同志社大学日本語・日本文化教育
センター

付記

本稿は、第225回青葉ことばの会・第398回日本近代語研究会（共催）での研究発表
表「「気づかない意味変化」の一例“すでにして”について—「すでにして研究発表
が始まった」とは？」（2022年12月10日・オンライン開催）に基づくものである。
なお、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用
基盤の共創」の研究成果の一部でもある。

（にいの・なおや 国立国語研究所員）

（2023年1月16日原稿受理）